

胆石の圧力・セラミック碎石術

—38 例の経験—

Piezo-ceramic lithotripsy of gall-bladder stones: initial experience in 38 patients: Hood KA, Keightley A, et al (Lancet i: 1322-1324, 1988)

体外式衝撃波碎石術 (ESWL と略) は今や腎結石の確立された治療法である。この技術は胆嚢や胆管結石の治療にも使われるようになった。第一世代の装置は衝撃波による痛みと患者を完全に水槽に浸さなければならぬ欠点があった。第二世代の装置は衝撃波の発生に圧力・セラミックスシステムを採用することで無痛とし、水槽を不要にした。

今回使用した装置は腎結石の碎石用に設計された Wolf 'Piezolith 2200/2300' 圧力・セラミックスシステムで、胆嚢結石の ESWL におい

て、この装置の効果、安全性および副作用を 38 例について評価した。対象は胆道痛などの有症状者、胆嚢結石は 1 個から最高 3 個、大きさ 10 mm 以上、X 線透過性で胆嚢管開存例とした。大きさを 10 mm 以上としたのは、それ未満の小結石の場合は、碎石器の超音波プローブを正確に目標に当て難いこと、また経口的胆汁酸療法のみで溶けるからである。38 例に対し 74 回治療を行い、胆石の崩壊は 34 例に認め、25 例は 1 回以上の治療を要した。成功例には CDCA または UDCA を投与し、胆嚢内の結石片の溶解を促進した。結石の崩壊は超音波検査、胆嚢造影で確認した。鎮静、鎮痛、麻酔なしで、全患者はよく耐え、術中、術後痛みや不快感を訴えた者はなかった。術後 24 時間は入院とし、その間バイタルサイン、尿、血液をチェックした。副作用は 2 例の顕微鏡的血

尿、1 例の肝機能障害、4 例の皮膚点状出血を認め、いずれも一過性であった。また、2 例のうち 1 例は 6 週後に急性膵炎、他の 1 例は 2 か月後に胆汁うっ滞症状を起こしたが、数日で自然消退した。なお、2 例とも ERCP で、胆嚢内に結石片を証明した。

以上、圧力・セラミック碎石術は胆石症の有効かつ安全な治療法である。しかし、結石片のあるものは胆管を流れ出るが、大部分は胆嚢内に残存するので、それらを溶解しなければならない。Sackmann らは ESWL 後の結石片の完全溶解に数か月間の経口的胆汁酸治療を要したと報告したが、この補助療法の効果は ESWL の対象となる胆石の種類とも関連するので、今後の検討課題である。

(県立愛知病院消化器科

種広健治 抄)